

終

[www.columnland.net](http://www.columnland.net)



人は死に向かって生きている。

生きる過程は自由。

何も考えずにすごしてもいいし

全力疾走してもいい。

ただ何をしたって人は終わりを迎える。

華やかな人生はいらない。

でも

ありがとう

さようなら

と言って自分とお別れしたい。

そんな素朴な言葉が美しく聞こえるのは

終わりが存在するから。

まだ見ぬ終わりに

乾杯。

終淵に祝杯を

## 物語の終わり

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす……」

平家物語の冒頭だ。勢いのあるものもやがていつかは衰え、滅びる。

終わりのない物語はない。当たり前のことだが、そうと分かっている作品を鑑賞し終えた後のあの「名残惜しさ」は毎度やつてくる。人の「死」についても同じことが言える。身内や著名人が死んだとき、人は故人の生前の姿に想いを馳せ、懐かしむだろう。そう、人は「終わり」を望んでいない。大抵、「ああ、なぜこの世のものはいつか終わってしまうのだろうか！」と嘆くのだ。

悲観することはない。「終わり」はまた、「始まり」を意味する。年若い朽ちた大木から別の植物がそれを糧にして芽吹くのと同じだ。老木の一個体の「終わり」も、若木にとつては「始まり」である。自然界はそういった死から生への「再生」のサイクルを機軸にして成り立っている。

逆に「終わらないもの」——「永遠」、「恒久」といった類のものは自然の常軌から逸している。永久凍土で生前の姿を保ったまま氷漬けになっているマンモスの死骸は、まさに自然界のサイクル外の存在だ。人間の目からすれば学術的価値のあるものとして映るだろうが、それは何百万年もバクテリアの養分にならずにいた結果である。

さて、終わらない物語というのが実は存在する。毎週おびただしい部数売り上げている雑誌の中には、十何年、あるいは何十年と連載が続いている人気漫画がある。これらのほとんどには、連載を終えられないという作者のジレンマがある。すなわち、終わらせたいタイミングで物語を終わらせれば良い作品に仕上がるが、次週から仕事が一つなくなる。編集部にも同様に、その作品の固定読者が雑誌を買い続けてくれるという思惑がある。

終わらない連載が及ぼす問題点として、ベテランの漫画家が連載スペースを圧迫することで若手にチャンスが回ってこないことが挙げられる。いわゆる、老害である。週刊雑誌という肥沃な土壌は朽ちることのない大木が大半を占めているのだ。いや、朽ちているかもしれないが、それは商業主義というつかえ棒がしてあるだけかもしれない。長寿漫画が終わるのは、読者が完全に飽きたとき、すなわちつかえ棒が無くなったときなのだ。

読者が完全に飽きてしまうまで連載された漫画、それは商業的には成功しているが、作品としては失敗だろう。一方、「名残惜しい」と思わせるような終わり方をした漫画はその全くの逆で、商業的には失敗しているが、作品としては成功だ。読者は、「名残惜しい」と思った作品に対して最大の敬意を払う。すなわち、作品を再び読み、内容を反芻するのだ。こうして作品が養分となつて読者に吸収され、作品は読者の心の中で見事に「再生」を果たす。

## 河童の世流れ

日本には数々の伝説が、ありました。が、色々な諸事情により、少なくなってしまうました。今回は、最近日本から、なくなったある伝説についてのお話です。

ある男は、質屋をやっております。ある日大きな荷物を持った男がやってきました。「すみません。このお皿質屋に入れたいんですけれど。」

荷物の中身は、それはそれは、立派な皿でした。

「五千万でいいんです。ただし、十年間は売らんといてください。」

「この中身一億相当ですよ。そちらがいいなら構いませんけれど。」

「ほんま、ありがたいです。」

「でもどうして、急にお金がいるようになったんですか。」

「わて、河童ですねん。一族が、河から追放されてしても、皿をはずして、都会で暮らさざるを得なくなっても、その頭金に必要やっただんです。」

「じゃあ、この皿は頭に乘ってた奴なんですか。」

「ええ。だから、すごく大事で大事で。絶対に売らないでくださいね。」

「もちろんですよ。でも、見たところ普通の人間にしか見えませんかねえ。」

「え、河童と普通の人間の区別って皿しかないですよ。でも、皿はすごく大事です。毎日毎日ぴかぴかに磨かないといけないんです。」

「驚愕の事実ですね。皿のことは、安心してください。毎日手入れしますから。」

「ほんまですか。ありがとうございます。ありがとうございます。」

「ところで、仕事とか決まってるんですか。」

「就職試験に受かって、春からサラリーマンですわ。でも、自信なくて。小さいころから、河しか知らんで育ってきて、自分が社会に役に立つかどうか分からないんです。」

「まあ、元気出してください。まだ希望捨ててないでしょう。」

「はい。必ず成功させて、この預けた皿を、回収しにきます。それまで持っていて下さい。そう言つて河童は、町に消えていきました。」

八年後のある日、あの時の河童が現れました。

「あの時の、河童です。皿を引き取りに来ました。」

「すごく、嬉しそうですね。はい、お皿。」

「あの時のまんまや。手入れしてくれたんですね。」

「うん、まあね。」

「謝礼も含めて、二億円です。」

「でも、二億円なんてどうやって稼がれたんですか。」

「宝くじで十億円あたったんです。残り八億円で海外に河を買って、また河童やるんです。」

「サラリーマンは、やめるんですね。」

「はい。同じ脱『さら』でも、違うもんですなあ。」

ある河童伝説の終わりはこのようなものだとか。

『超巨大隕石衝突まであと二十五時間です。後五時間でシャッターを下ろします。まだ避難が済んでいない方は・・・』

「おはよう。熊本さん、長野君」

「僕が学校についた時には既に二人は学校にいた。政府による世界の終わり宣言の後でもまだ三十人ほどいたこの学校の生徒も既に三人。ただ一人地上に残ってくれた石川先生も、昨日僕たちとお別れした。」

生徒の間では鬼だ悪魔だと言われる石川先生も、昨日の授業が終わった後には泣きそうだった。たっけ。

「一時間目だな。誰かチャイムならせよ。」

「君は放送委員だろ。」

「チャイムは自動だからわからねえ。そういや電気止まっているし。」

「シェルターを生かすためにエネルギーは全部持ってかれちゃったしね。千葉さんが嘆いてたよ。これじゃ満足に治療もできないって。」

「あのジジイまだ残ってるの？熊本。」

『「まだ人がおるかもしれん」って避難しないらしいよ。』

「あのジジイ目が合うと追ってくるんだよ。『早く避難せんかい小僧ども！』とか言つて。自分はどうなんだよ。」

「いい人なんだね。」

「二時間目か。」

「眠くなってきた。」

「山形君、寝不足？」

「うん。昨日ドラ〇エやってたんだ。クリアしないと死んでも死にきれない。」

「確かに死にきれねえな。俺はワ〇ピースの最終巻が読めなかった事が心残りだ。」

「そーいや本屋のおじさんは避難したの？」

「いんや。今日の行きを見たよ。奥さん、まだ見つからないみたい。あれだけの混乱の中、はぐれたならもう会えないと思うけどな。」

「そんな事言っちゃ駄目だよ長野君。きっと、

見つかるって。君のお姉さんとお父さんも。」

「…悪い、そうだよな。」

「三時間目だね。」

「山形寝てるぜ。」

「そつととしてあげなよ。長野君。」

「そーいやこいつって、なんで残ってるんだっけ？」

「私にも分からない。家族はもう避難したって聞いた。」

「…ん。こいつなりに思うところがあったんだろ。案外、ドラ〇エのためかも。」

「あはは、それはないでしょ。」

「姉さんは見つからないのか、熊本。」

「うん、千葉さんも探してくれてるけど。お母さんはもう避難した。」

「…でも俺たちもさ、もう地上にいる意味、ないじゃんか。なんでいるんだろ。避難はもうできないわけだし。今更家族見つけても、一緒に死ぬくらいしか意味ないんだよなあ。」

「理由なんて無いよ。そういうもんなんだよ。少なくとも私も私にとっては。」

「四時間目。」

「やつと起きたか。メシどうするよ。カロリーメイトもうないぞ。」

「あ、トラックの荷台から食べ物が山ほど見つかったの。持って来たからそれ食べましょ。」

「よっしや！久しぶりにまともな食事。」

「じゃ、明日も頼むよ。」

「…明日、ね。うん。持ってくるよ。何がいい？」

「俺、シユークリーム。」

「僕、モンブラン。」

「もう！少しは栄養のあるもの食べようよ！」

「帰るか。」

「ねえ、最後だし、学校に泊まってもいいんじゃない？」

「帰ろうよ。」

「どうして？」

「そういうもんでしょ、学校って。なんで今日だけ特別なの？」

「俺は時々お前が分からないけど、まあ、その意見には賛成だ。」

「私には分からないよ。怖くないの？」

「怖いよ。でも、ここで帰らないと、未練が残っちゃう。さっぱりとね、終わりたいんだ。」

「そーだよ。なんて言うの？最後だからこそ、いつも通りみたいな。そんなのに憧れる年頃なんだよ。」

「じゃ、また明日」

それが、別れの言葉だった。別れても、振り返らない。きつと皆もそうだろう。帰り道、地上に残されたベツト達が花屋のおじさんに群がっていた。あの人は人間の都合で飼われ、捨てられた動物に責任を感じたのだろうか。家族全員で手をつないで町を歩く親子を見た。あの人は未来に希望が持てなかったのか、それとも地上か、国か、自然か、そんなものに未練があったのだろうか。

帰ってから屋根に登って夕日を見た。今まで一番きれいに見える。全てが終わる間際だからこそ、色々なしがらみを取り払われて、穏やかな心地になる事ができる。

僕が残った理由。別に死にたいわけじゃない。死から逃避するのではなく、向き合って、理解したかった。熊本、長野、石川先生、千葉さん、花屋のおじさん、あの親子、本屋さん、皆、自分の死と向き合って、納得してここにいる。ぼくもそれに感化されてしまったのかもしれない。彼らと死ぬのも悪くないかな、と思えてしまったのだ。

風呂は無いのでタオルで体を拭いた。窓も閉めた。ご飯も食べた。明日の用意をしよう。体操着は必要だ。制服のシャツにはちゃんとアイロンがかかっている。

それではおやすみ。また明日。

## 「生」の終端

「生」の終端について論じる前に、まず人間に「生」が与えられる瞬間を定義しておく。自我を持った時、母体から出てきた時、受精卵が出来た時、人類が誕生した時など様々な見方があるが、ここではへその緒を切った時を『生』の瞬間とする。

この場合の『生』とは、母親と肉体的に分かれ、一生命体として独立した状態を指すことになる。つまり自身が明確になった瞬間である。このことにより、自分、というものを形作るのに必要不可欠な、他者、が発生したのだ。

そして、繰り返しにはなるが、その、他者、との関わりが、自分、を作っていく。他者、と関わりを持っている自分こそが真実、自分、なのであり、『生』を有しているのだ。

なので私は、人間が生きることとはすなわち与えられた『生』を育てることだと思う。故に肉体が死しても、人々の中に思い出として、自分、が生き付いていれば『生』を有しているのだ。そしてその『生』は死ぬ前に自身が他者と育ててきた、自分、の残り火なのだと思う。

棺かんを蓋おおいて事定ことごとまる

この言葉は「人間の真価は、死んでから決まる」という意味で、私が真理だと思っている考えである。自分、の残り火がどれだけ大きいか、またどれだけ灯り続けているか、それこそが『生』において重要なのである。

そしてついに残り火が消え、自分、が、他者、から消え失せた時、その瞬間こそが『生』の終端だと私は思う。だから私は多くの人と関わりを持ち、充実した生き方をし、死した後も他人に、自分、の残り火を灯し続けてもらいたい。

皆さんは「生」の終端はどこだと思いますか？

## 愚愛

唐突な中国の対米宣戦から二年が過ぎた。

人民解放軍は開戦と同時に国内の外資系工場を占拠、軍事転用。開戦当初は優位に立っていた米国も、その圧倒的物量に次第に押されはじめるとなり、遂には本土上陸を許してしまう。攻め入られる経験の無い米国はこれに過剰反応し、独断で核弾道ミサイルの発射を決定する。あまりにも愚かな選択だった。中国は弾道ミサイルの有効な迎撃手段を持たず、しかし多数の核ミサイルを保有する国家である。行き着く先は、火を見るより明らか。

二年間続いた戦争が、そして世界が、終焉を迎えようとしていた。

「イージス護衛艦」あしがら艦長の久保田は、核ミサイル発射の報せを戦闘中に受け取った。弾道ミサイル迎撃能力を有するあしがらは、その時点で唯一ミサイルを止めうる位置にあった。だが友軍の核使用に混乱・麻痺した日本政府から迅速な迎撃命令は下らず、久保田は解放軍フリゲート艦四隻に囲まれながら決断を迫られる事になる。

迎撃を行うか、否か？

勿論、迎撃が正しい。久保田の理性はそう告げていた。核の恐ろしさ、核の招く凄惨な結末について、久保田は当然熟知している。核戦争、そして人類滅亡のリスクに釣り合う選択肢など、あろうはずもない。だがそう分かっていても、久保田の感情がそれを許さない。

久保田は、あまりに多くのものを奪われていた。米軍が駐留する日本は米中両者に前線基地と見られる立場にあった。専守防衛の徹底された自衛隊は最前線において的でしかなく、久保田は数多くの戦友が目の前で散っていくのを見てきた。そして何より、久保田は解放軍の爆撃によって、家族を、妻子をも失っていた。

あの憎い憎いクソ共を吹っ飛ばすミサイルを、どうして、なぜ、墜とさなければならぬ？ 人類が誇らしげに持つ理性は、感情によっていとも容易く流される。米国のそれと全く同じように、久保田の愛が、それを奪われた怒りが、愚かな選択をさせようとしていた。怒りが、そして怒りを生む深い愛が、人を愚かにさせる。

「<sup>立</sup>直<sup>刻</sup>ちに<sup>停</sup>攻<sup>止</sup>め<sup>中</sup>を<sup>我</sup>本<sup>艦</sup>は<sup>現</sup>在<sup>中</sup>に<sup>核</sup>ミ<sup>サ</sup>イル<sup>の</sup>迎<sup>撃</sup>を<sup>行</sup>う！」

全域通信と外部スピーカーで久保田が吠える。唇を噛みしめ、拳を痛いほど握りながら。久保田を押しとどめたのは理性ではない。親が、友が住む国を、戦友が、妻が、子が眠る国を、焦土にさせたくはない。あしがらによって核迎撃がなされれば、少なくとも日本は核報復から免れる。そんな利己的な愛が、世界を救う。

航行を停止し完全に包囲されたあしがらに装填される、迎撃ミサイルSM3。命を救うためのミサイルが今、世界の命運を乗せて発射される。



終わりへのパレード

気がつくど、夜のオフィス街に居た。目の前には、珍妙な姿の男が立っていた。

「貴方、誰？」

「こんばんは、お嬢さん。私は扇動する先導者、名も無きピエロでございます。先導しますは、終わりへのパレード。尽きる前に終わった者たちの、時間つぶしの大騒ぎです。」

ふと見ると、彼の後ろには魑魅魍魎が蠢いていた。私の視線に気づいたかのように、ピエロは真っ赤なメイクをした口を開く。

「彼らは闇を追われた妖怪。科学の光が溢れる現代、彼らの居場所はありません。ですが庶民が心の隅で、彼らを望むもまた事実。信じる者がいる限り、彼らの命は尽きません。誰もが彼らを忘れる日まで、彷徨い過ごしているのです。」

ピエロが歌うように紹介する間も、一反木綿や天狗が舞い、鬼と河童が取る相撲を、から傘お化けを手にした三つ目小僧が眺めていた。妖怪たちを見ていると、時代錯誤な妖怪たちが多く、ひらひらした服を身にまとった少女が、こちらに手を振っているのに気がついた。

「彼女は？」

ピエロに尋ねると、彼は涙目のメイクを歪めて答えた。

「彼女は人気のあるうちに、引退を決めたアイドルです。ここに居るのは文字通り、メディアが作った偶像ですが。未だに諦めきれないファンが、彼女を終わらせないのです。とはいえず、昨今アイドルは、どうやら量産される模様。そう遠くない将来に、彼女は終わりを迎えるでしょう。そして別の偶像が、今度はここへ来るのでしよう。」

そう言われてみれば、昔何かのCMで見たことのある姿だった。確かに最近テレビで見なくなっていた。引退していたなんて、知らなかったけど。しみじみと視線を戻すと、彼女にこれまた珍妙な格好の男が話しかけていた。

「彼もピエロなの？」

ピエロに尋ねると、心外とばかりに強く首を横に振った。

「彼らは消えた芸人です。ネタの質は変わらずとも、流行り廃りは激しいようです。ブームに煽られヒットをしても、新たなネタを作らなければ、あっという間に飽きられます。メディアアの露出は終わっていますが、真似する子供がまだ居るのです。小学生が真似をやめれば、彼らはすぐに終わるでしょう。」

それであんな姿を。納得すると同時に、どこか哀れに感じた。DJ風の姿の男や、ホストのような男、実戦には堪えないプロレスラーのような男も居たが、きつと芸人なんだろう。私はもう少し彼らを眺めると、ピエロに向き直った。そして、一番聞きたかったことを彼に尋ねた。

「それで、どうして貴方達はここに？」

答えは、心の隅で気付いてはいた。

「おや、お分かりでない。貴方をご招待にあがったのですよ。」

やっぱり。私は、背後のビルの屋上に残した、揃えた靴と、最期の手紙を思い出す。私の表情を見て、ピエロは下品な笑みを浮かべて謳う。

「愉快で奇怪な後悔のパレード。帰る気になるその時か、還る事になるその日まで、死ぬほどお楽しみ頂きましょう。」

小芝居じみた振る舞いで差し出された彼の手を、私は静かに取った。

## 春を歌う

雪もまばらに残っている三月。体育館も暖房は設置してあるものの気温は冬のそれだ。いつもはうるさい男子も今日だけは静かに座

って敵かな雰囲気をもとっていた。彼らにも振り返る思い出があるのだな、と私はぼんやりと眺め卒業証書を手にしなから思った。卒業証書なんてただの紙切れなのに、ひとりひとりとスポットライトを当てられて三年間の思い出を込めると特別なものに変わっていく。そんなに好きな担任じゃなかったのに名前を呼ばれるのも最後かと思うと一抹の寂しさを覚える。長いようであつという間に時間は過ぎていく。終わりの時間が近づいていく。

それは春 光あふれる  
学び舎を 今菓立つ時

私の高校では卒業記念賛歌というものがある。文字通り卒業生のための歌。在校生も教師も抜きにして、卒業生のみで歌われる決まりになっていて、前期試験が終わって卒業式までの間に音楽指導されるのだ。受験対策ばかりを行っていた後に音楽の授業というものはなかなか新鮮である。卒業生もこの授業だけは真剣に受けているのか、毎年素晴らしい歌声を披露してくれる。私たちもついにその番が来たというわけだ。卒業生、起立。

ありふれた そんな日々さえ  
いとおしく 輝いている

変わりたい、と切に願った。変わろう、と強く思った。入学したとき一度きりの高校生活を目いっぱい楽しもうと決めた。毎日が楽しかったと言えば嘘になってしまうけれど、空っぽだった今までの学校生活は、私という器からはあふれてしまうほどに満たされた。

気持ちには歌に乗せて、あふれ、広がり、響き渡った。

ときに笑い 迷いつまずき  
わからずに 人を傷つけた

卒業記念賛歌を歌い終わった後、毎年数分の空白の時間が流れる。そして閉式の言葉で終わる。在校生だった頃には何の意味があるのかもわかっていた。温和で優しそうな校長と目が合った。つまらない話をする人だと思っても話を聞き流していたけれど、粋な事をする人だな、と今わかった。空白の時間は泣いてもいいよ、ということなのだ。今、私は全然寒いと感じていなかった。熱いものが頬を伝っていき、私は、はらはらと泣いた。女の子で良かった、と思う。今この場で泣いていても全然違和感がないからだ。泣いてぐしゃぐしゃの顔でにっこりと笑ってやると、校長がゆっくりと閉式の言葉を告げ、卒業生は体育館を後にした。

いざゆかん 涙を拭いて  
ご覧なさい 美しい空

絶対に忘れたくないと思う。いつか忘れてしまうかもしれないけど、今は輝いていたあの目を誇りに思っただけ。卒業生、起立。

終わりに思っただけ。これからまた新たに始まっていくのだ。

恐れれ心も 消し去って  
踏み出そう 新しき道

「そうだ、自殺しよう」

ある日私は自殺することに決めた。生きていてもつまらないし、どうせいつか死ぬなら今死のう。そう思ったんだけど、普通に飛び降りやら首吊りやらで死ぬのは面白くない。

「世界の終わり、とかいいかも」

というところで世界の終わり、北極の果てでオーロラを見ながら船から飛び降りることに決定しました。いいい。

### 世界の終わりで

「うーあー寒いー」

自殺することを決めて三週間後、私は北極圏を進む船に乗っていた。五十四万円とかぼったくりかと思っただけど、どうせもう使うことのないお金だし奮発した。まあおかげで超快適だけど。

で、甲板に出て今に至ります。寒いです。いっばい着てるけど超寒いです。

「北極圏への旅行は初めてですかね？」

隣にいたおじさんが英語で話しかけてきた。

「とかいうか国外が初めてですよー」

こちらでも英語で返す。習っててよかった英会話。

「初めての海外旅行で北極とはすごいお嬢さんだ。

ホットビールでもいかがですか？」

ホットビールっていうその名前の怪しさにちよつと躊躇ったけど、本当に寒いから有り難くいただいた。温かい。味は予想通り残念だけど。

「今日あたり見えませすかねー、オーロラ」

「自然現象だから絶対とは言えませんが、見れると思いますよ」

そう言っておじさんは空を見上げた。いまさらだけど星が綺麗だ。星ってこんなに輝いていたんだなと思つて、柄にもなく感動した。東京に住んでるのって人生の三割は損してるのかもしれない。

にしてもオーロラが見れないと困る。死ぬタイミングが見つかからないじゃないか。そんなことを考えながら、見知らぬおじさんと静かに空を眺めていた。

「あ」

しばらくして一瞬だけ空に翡翠色の霧がかかり、すぐに消えた。しかしまたすぐに現れ、今度は消えることなくその光を強めていく。

「おおおお」

オーロラだった。テレビやネットでしか見たことのない、綺麗なオーロラだった。周りの人も気づいたようで、控えめな歓声が沸き起こる。翡翠色のカーテンはそんな喜びに応えるように、柔らかに揺らめいた。

やばい綺麗だ。テレビで見たのとか比べものにならないくらいきれいだ。あー、早く海に飛び降りなきゃ。でももつと見ていたい。

どれくらい経ったのだろう。見とれている間に、オーロラは消えてしまっていた。

「なんてことだ、あんな綺麗なオーロラは初めて見たよ！」

おじさんが絶賛しているけど、私はオーロラとか見るの初めてだからどれくらいすごいかわからない。でも、とても綺麗だった。

「ねえおじさん、世界には、他にも綺麗なものがあるのかな」

「ん？そりゃあたくさんあるさ。エベレストから見る景色や中国の桂林、オーストラリアのグレートバリアリーフも素晴らしいよ。まあ一番は我がカナダの樹氷だけだねー」

このおじさんがそう言うなら、本当に綺麗なんだろうな。ちよつと、いやかなり見てみたい。死ぬのはその後でいいのかもしれない。

「よし、まずはオーストラリア行こう」

カナダじゃないのかとおじさんが落ち込んだ。ごめんなさい次は暖かいところがいいんです。あ、でも今回でほとんど貯金使っちゃったからお金貯めないと。うー楽しみすぎてやばい、早く行きたい。

こんなにテンションが上がったのっていつ以来だろう。この世界の終わりに来てよかった。私の物語はまだ終わらない、というか始まったばかりなのかな。

「まあ、のんびり死ぬとしますか」

満天の星空を見つめて呟いた私は、自分でもびっくりするくらい清々しく笑っていた。

## コンテスト結果

| コラム番号 | コラムタイトル    | 点数  | 順位  | 特別賞  |
|-------|------------|---|-----|------|
|       |            | まじょコメント   |     |      |
| 01    | 世界の終わりで    | 17 pt   | 2 位 | 2 sp |
|       |            | <p>まあ、のんびり死ぬとしますか——このキメフレーズが、なんとも滋味深い。</p> <p>そうだ、〇〇行こう、というおなじみキャッチコピーの軽やかさが全体に効いていて、翡翠色のカーテンに見とれつつ、北極なのに、とてもあたたかな今年度の読み納めでした。</p> <p>春休み、たくさん旅をしてくださいな。</p> <p>1ポイント差でカップクんに持って行かれたけれど、でも舞台にふさわしい銀メダルですし、イチオシフリーズ大賞は逆に1票差でカップクんに勝ったし、ハッピーエンドですね。おめでとう!!!</p> <p>特別賞：セカンドインパクト賞 from Q.E.D.版（この船の今後に期待。北極なら冰山も多いことでしょう www）死にま賞 from へXしょん班（冗談だよ）</p> <p>イチオシフレーズ：「そうだ、自殺しよう」×2 「いえい。」「カナダじゃないのかとおじさんが落ち込んだ。」×2</p> |     |      |
| 02    | 春を歌う       | 7 pt  | 4 位 | 0 sp |
|       |            | <p>歌詞だから、ちょっと気恥ずかしいセリフも無理なく口に乘せられてしまう。その機微をうまく生かして、ベタに描写するより数段さわやかに、別れのシーンをまとめていただきました。グッジョブ。</p> <p>これ女子校（むしろ学園）だったら、もっとヤバかったかな？なんて。</p>   |     |      |
| 03    | 終わりへのパレード  | 9 pt  | 3 位 | 2 sp |
|       |            | <p>成仏できない怨霊たち。ふつうは怨念の深さが成仏できない原因、と来るのですが、そこを敢えて逆に、世の人々が彼らを忘れない限り成仏できないのさ、と。ある意味、とてもとても残酷な設定ですね。その残酷さ無情さが、しっかりピエロの仕草や表情に乗っていて、なかなかホラーなラストでした。</p> <p>ダークテイストが異彩を放ったおかげか（？）ブロンズ・メダルゲットです、おめでとう！</p> <p>特別賞：「時よ止まれ、汝よいかにも美しい」で賞 from ONE MORE PLAY?班 こ〇まよ〇おにささぐ賞 from Yonagare班（ハード〇イとかえ〇はる〇とかみろいろいろいたよね。今どうしてるのでしょうか）」</p> <p>イチオシフレーズ：「きっと芸人なんだろう</p>  |     |      |
| 04    | お後がよろしいようで | 1 pt  | 7 位 | 2 sp |
|       |            | <p>えーとえーと、答えは愛！</p> <p>そんな、なかなか分かるものではありません。</p> <p>おかげで一位賞品がケチャップとマヨネーズになりかけたではありませんか。</p> <p>何はともあれ、おしあわせにっ。</p> <p>特別賞：その心はなんで賞 from END班（オチを説明してほしい）この流れ好きで賞 from 終班（先週のアレがよみがえった。）</p>   |     |      |

|    |           |  |     |      |
|----|-----------|--|-----|------|
| 05 | 愚愛        | 1 pt   | 7 位 | 0 sp |
|    |           | 命を救うためのミサイル。ラストのフレーズがさわやかに決まっています。ルビの遊び方とか芸が細かいのも手をかけた感でナイス。<br>その決断をした久保田エライ！でも軍法会議だろうなあ。その点でも、終わり、か？   |     |      |
| 06 | 「生」の終端    | 2 pt   | 6 位 | 0 sp |
|    |           | これはみごとなロジック組み立て。生の発端から説き起こして、関係性こそ生の本質だときっちり定義し、だから残り火のある間は、ずっと生きています、と。<br>あざやかで説得的でした。それを絵にしたのが3番作品、と。ナットク！  |     |      |
| 07 | WORLD END | 5 pt   | 5 位 | 3 sp |
|    |           | 終わりが間近だからこそ、ふだん通りの「今」が限りなくいとおしい。手をつないで歩く家族の姿に吸い寄せられました。<br>ラストが特にしみじみ。自分だったらどうするかなと言外に語りかけてくる感。<br>力作にはめこんだ名前遊びがウケて最多特別賞でした。おめでとう！<br>特別賞：ドラ○エはできるんで賞か？ from Shuryo班（電気止まってるんですね？） 秘密の県民で賞 from これでもいいのだ班（登場人物が全員県名だから） 作者は何県民で賞か？ from World Ends with U（気になりました） |     |      |
| 08 | 河童の世流れ    | 18 pt  | 1 位 | 0 sp |
|    |           | 関西弁のカップくん、いいキャラクターだなあ。動じず預かった質屋さんもエライエライ。よけいな描写がなく、会話だけですする運ぶのが、コントを見ているような分かりやすさで、「海外に河を買う」なんていう気宇壮大さもここちよい。<br>悪人ひとりも出てこない、ほのぼのストーリーにほっこりです。「脱さら」がヒットして最終回の覇者と輝きました。おめでとう!!!<br>イチオシフレーズ：「脱『さら』」×2 「同じ脱『さら』でも、違うもんですなあ」「色々な諸事情」                                  |     |      |
| 09 | 物語の終わり    | 0 pt   | 9 位 | 0 sp |
|    |           | いきなり祇園精舎。大きな世界の様相から、ぎゅうつと絞り込んでコミック誌の世界へ。流れはいいけれど、ちょっと前置きが大きすぎたか。<br>連載の終わり方論は、うんあるあるとそれぞれなりの納得ポイントを突いてくるのですが、ここは具体例をいくつか挙げたほうが説得的だったかも。<br>正統直球派、おつかれさまでした。  |     |      |
| 10 | 終淵に祝杯を    | 0 pt   | 9 位 | 1 sp |
|    |           | 特別に気取った言葉は何も用いられていないのに、いやだからこそ、ずっと心に響いてくるフレーズたち。すなおに「乾杯」と唱和したくなるラストセッション表紙でした。<br>特別賞：ナルシスト賞 from Hello World班（バスローブ着てグラスで持ってるんだろ。ゴルゴ13で殺される   |     |      |

んだ。サヨナラ言うヒマもねーぞ。)